

On the Distribution of the Dialect near the Machino River in Noto

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kawamoto, Eiichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00004590

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



能登地方町野川流域の方言分布*

川 本 栄 一 郎

はじめに

能登の方言は、奥能登と口能登に二分されるが、能登の方言には、このほかに、内浦に対する外浦といった地域差もまた認められる^(註1)。国立国語研究所編『日本言語地図』によると、奥能登の中でも、宇出津から曾々木に至る町野川流域にそれが最もよく現われる。そこで、この地域を対象にきめの細かい言語地理学的調査を行えば、奥能登方言の歴史を再構できる手がかりがなにか得られるのではないかと考え、昭和49年9月から昭和50年7月にかけて、音韻と語彙を中心に臨地調査を行なった。以下、分布の実態を明らかにし、あわせて、この地域における方言の歴史についても考えてみることにしたい。

1 資 料

資料はすべて臨地調査によって集めた。臨地調査はナゾナゾ式質問法によって行なった。

調査項目は全部で133項目ある。その内訳は次の通りである。

1) 音韻に関するもの

獅子・寿司・煤・雀・蜆貝・鈴・筋・知事・地図・口・靴・草鞋(以上、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」)・咳・背中・汗・銭・風(以上、「セ」「ゼ」)・咳・背中・竹・大根・猫(以上、カ行音の有声化)・鏡・蜆貝・ひげ(以上、語中尾のガ行子音)・綿・草鞋・鯖・煙草(以上、「ワ」と「バ」)・ひげ(「ヒ」)

2) 語彙に関するもの

蛙・ひきかえる・おたまじゃくし・めだか・かたつむり・なめくじ・蟻地獄・かまきり・せ

きれい・牛・牡牛・牝牛・子牛・馬・牡馬・牝馬・子馬・たてがみ・とさか・もぐら・とかげ・かぼちゃ(総称)・かぼちゃ(ちぢんだ)・かぼちゃ(すべすべした)・とうもろこし・じゃがいも・さといも・さつまいも・山ぶどう・桑の実・とげ(枝の)・とげ(裂片)・すみれ・きのこ・稲架・もみがら・糠・糯・炊く・煮る・湯気(やかん)・湯気(ご飯)・がんもどき・塩味がうすい・塩からい・匂いをかぐ・狙板・摺粉木・摺鉢・まぶしい・つらら・しもやけ・鏡餅・いろり・上座・下座・右座・左座・あぐらをかく・正座する・ネマルの意味・坐る(総称)・膝頭・井戸・真綿・熊手(竹)・熊手(木)・熊手(鉄)・コマザライの意味・親類・分家・曾孫・幼児籠・おんぶする・背負う(荷物)・かつぐ(材木)・かつぐ(天秤棒)・かつぐ(二人で)・かつぐ(おみこし)・背中当て・小指・舌・唇・眉・ものもらい・鬼ごっこ・かくれんぼ・お年玉・竹馬・凧・めんこ・片足跳び・肩車

話者はすべてその土地生え枝きの老人である。年齢は70歳を基準とし、主として男性を調べた。女性を調べた場合は、表1に掲げてある生年の前にFとするしてある。表1に掲げてある生年は、すべて明治何年生まれかを表わしている。調査地点は全部で76地点ある。調査地点の位置は、2桁の地点番号を用いて図1に示してある。

2 地理的分布

地理的分布の中で最も注目されるのは、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の混同が、外浦にはほとんど見られず、内浦に集中しているという

*昭和50年9月16日受理

ことである。能登半島にこのような東北や出雲のズー弁に似た音韻現象があるということは、これまでも知られていたのであるが、内浦と外浦との間にこうした明瞭な地域差があるということは、従来ほとんど明らかにされてはいなかった。以下、この問題を中心に、音韻・語彙という順序で分布の状態を見ていくことにする。

2. 1 音韻の分布

2. 1. 1 「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の混同

次に掲げる表1は、各地点における「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の音声を語ごとに示したものである。凡例にも示してある通り、表の中の○印は〔fi〕〔dzi〕〔tʃi〕、■印は〔su〕〔dzu〕〔tsu〕、●印は〔si〕〔dzi〕〔tʃi〕、●印は〔sü〕〔dzü〕〔tsü〕、◎印は〔si〕〔dzi〕〔tʃi〕とも〔sü〕〔dzü〕〔tsü〕とも判定しがたい両者の中間的な音をそれぞれ表わしているが、この地方にはタ行音の有声化は認められないので、無声の摩擦音を子音とするものは「ジ・ス」の音声、無声の破擦音を子音とするものは「チ・ツ」の音声というふうにとめられる。

なお、表1に掲げてある地点のうち、狼煙・折戸・大谷・上山・宗末・宇都山・中田・岡田・飯田・小泊の11地点については、昭和44年8月から11月にかけて行なった臨地調査の資料を用いた。

はじめに、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の区別が明瞭な地点に見られる混同現象について述べる。

「シ・ジ・チ」を〔fi〕〔dzi〕〔tʃi〕、「ス・ズ・ツ」を〔sü〕〔dzü〕〔tsü〕と発音し分ける地点でも、「寿司」と「地図」の二語だけは発音のしかたがうまくいかず、「寿司」は〔süsü〕、「地図」は〔tsü dzü〕と発音することが多い。たとえば、清水(98・80。以下、地点番号は()で括って示す。)・仁江(98・15)・真浦(98・98)・粟蔵(98・90)・谷野地(98・24)・大

谷(98・11)など。一見これは南奥羽地方のズー弁と同じ音韻現象のように思われるが、実はそうではなく、「寿司」の場合は「ス」の順向同化作用によって起き、「地図」の場合は「ズ」の逆向同化作用によって起きた語彙的な現象にすぎないといえる。

「寿司」「地図」の次に注目されるのは「蜆貝」である。これも、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の混同の認められない徳成(98・16)・大西山(98・03)などの地点で、〔südzümeŋæ〕と詠った形で発音されているが、これについても、南奥的ズー弁が背後にあって出てきた詠語ではなくて、「烏貝」に対する「雀貝」という民衆語源が働いて生じた詠語と説明される。

ただし、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の混同の著しい、たとえば、金蔵(98・79)・上藤ノ瀬(08・10)・平体(08・23)・源平(08・54)・大平(08・18)・宇出津(08・10)・真脇(08・12)・小木(08・19)・波並(08・87)などの〔südzümeŋæ〕については、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」を混同する現象がベースにあってそれへ民衆語源が加わって出てきた詠語と見ることができよう。これらの地点で〔südzümeŋæ〕にならずに〔südzümeŋæ〕になったのは、「誤まれる回帰」(「ス・ズ・ツ」を〔sü〕〔dzü〕〔tsü〕と正したことの行きすぎ)によるものと解される。

なお、御陳乗太鼓で有名な名舟(98・28)の場合は、以上の現象とは逆に、発音が明瞭すぎるといって注目される。「ス・ズ・ツ」の音声は殊に明瞭で、「煤」「寿司」「雀」の「ス・ズ」はどれもみな〔su〕〔dzu〕と発音される。

「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の区別が明瞭な地点については以上にとどめ、次に、混同の著しい地点について述べる。

表1によると、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の混同が最も著しいのは、中(98・79)・宇都山(98・48)の2地点である。これらの地点では、表1に掲げてある語例のすべてに混同が認められ、しかも、その音声はすべて〔si〕〔dzi〕

表1 「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の地点別一覧

地点番号	地名	話者の生年	シ		ジ		チ		ス		ズ		ツの 数
			獅子	蜆貝	壽司	草鞋	知事	知事	地囃	口煤	雀煤	雀煤	
89.83	狼煙	F25	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
54	折戸	F28	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	4
98.11	大谷	F10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
80	清水	F45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
15	仁江	38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
98	真浦	34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
53	曾々木	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
99	大久保	45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
25	大川	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2
23	里	22	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
92	東大野	36	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
54	南時国	37	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2
52	大寺山	32	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
90	栗蔵	32	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
57	佐野	27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
79	金蔵	27	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	5
36	浜田	37	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
28	名舟	34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
61	白米	32	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
74	野田	F34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
55	谷野地	F45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
38	西院内	44	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
16	徳成	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
69	麦生野	41	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
03	大西山	F32	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
91	忍	39	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
93	東山	38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
54	長尾	35	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	4
18	小間生	41	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
62	鈴ヶ嶺	44	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	8
37	桐畑	40	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
68	鴨川	40	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
73	金山	39	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7
24	上河内	24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
88	大箱	30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3
63	五十里	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
74	野田	F24	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10
29	久田	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
34	笹川	37	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	14
92	天坂	33	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	15
42	四ッ谷	F31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
27	黒川	37	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
82	十郎原	29	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	14
04	当目	39	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
66	神和住	29	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15
36	寺分	35	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	15
46	上町	37	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10
45	合鹿	43	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	6

[tʃi]である。つまり、これらの地点では、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の区別がなく、どちらも、北奥方言や出雲方言と同じように [si] [dzi] [tʃi] と発音していることになる。これ

地点番号	地名	話者の生年	シ		ジ		チ		ス		ズ		ツの 数
			獅子	蜆貝	壽司	草鞋	知事	知事	地囃	口煤	雀煤	雀煤	
98.36	上山	F24	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
92	宗末	F25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
79	中	24	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	17
48	宇都山	F29	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	17
96	中田	F31	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11
59	鶴飼	38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
87	松波	27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2
99.94	岡田	F28	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	14
33	小泊	29	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
95	飯田	F29	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15
08.32	立ヶ谷内	35	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	14
22	下藤ノ瀬	44	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
65	吉尾	30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
79	曾又	42	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
81	宮地	34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
43	鶴町	41	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10
94	上藤ノ瀬	38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
23	平体	33	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3
54	源平	F39	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
18	大平	23	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	6
16	宇出津	33	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3
12	羽根	21	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	16
13	真脇	45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
19	小木	37	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	8
61	宇加塚	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
40	猪平	F38	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	14
87	波並	27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3
69	矢波	F32	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	15
73	神道	33	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10
36	瑞穂	36	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11
43	鶴川	31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2
90	甲	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
09.45	白丸	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2

- ……[ʃi] [dzi] [tʃi]
- ……[su] [dzu] [tsu]
- ……[si] [dzi] [tʃi]
- ……[sü] [dzü] [tʃü]
- ◎……[si] [dzi] [tʃi] と [sü] [dzü] [tʃü] の中間的な音

らの地点ほどではないが、同様の傾向は、他の地点にも多く見られる。そこで、この地域におけるこうした現象の分布傾向を、まとまりよく把握しようとする場合には、まず、この [si] [dzi] [tʃi] の現われ方に着目する必要があると考え、[-i] の出現頻度数を地点ごとに調べてみることにした。次に掲げる図1は、その結果を地図で示したものである。「シ・ジ・チ」

「ス・ズ・ツ」の区別と[-i]の数との関係については、改めて述べるまでもないことであるが、[-i]の数が多くなればなるほど混同が著しくなり、[-i]の数が少なくなると、それに伴って混同もまた減少する、というふうに説明される。[-i]の数は、この地域の方言にとって、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の混同の有無を示す標識の役割を果たしているといえる。

図1 [-i]の数の分布

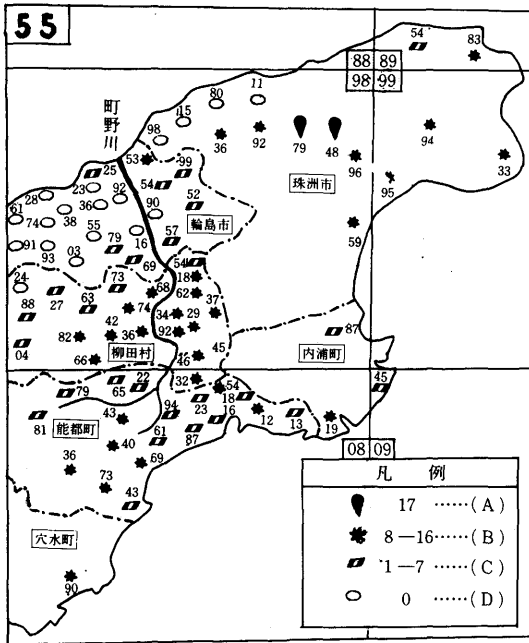


図1によると、[-i]の現われ方には明瞭な分布傾向が認められる。すなわち、飯田(99・95)から外浦に至る地域の場合にも、宇出津(08・16)から外浦に至る地域の場合にも、[-i]は内浦に多く外浦に少ないという共通の分布が見られるのである。ただし、くわしく見ると、両地域における[-i]の現われ方はかならずしも同じではなく、珠洲市山間部の宇都山・中付近には[-i]の数の最も多い(A)がまとまって分布しているのに対し、宇出津付近にはそれが見られず(B)がまばらに分布しているにすぎない、といったちがいが両者の間には認められる。

以上のことをまとめていえば、「シ・ジ・チ」

と「ス・ズ・ツ」を混同する音韻(以下、これを「ズーズー弁」と呼び、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の区別の明瞭な音韻を「非ズーズー弁」と呼ぶことにする。)は、内浦にだけあって外浦にはなく⁽¹²⁾、しかもそれは、内浦の中でも、特に半島先端の珠洲市山間部において著しいということになる⁽¹³⁾。

それでは、このような地理的分布には、どんな歴史が反映されているのであろうか。次の二つの場合がまず考えられる。一つは、ズーズー弁と非ズーズー弁の間にもともと交流がなく、両者は古くから相拮抗する形で存在してきたということ、もう一つは、非ズーズー弁のズーズー弁化にしろ、ズーズー弁の非ズーズー弁化にしろ、ともかく両者の間には何らかの影響関係があり、現在見られるような地域差もそれを通して生み出されたということである。外浦にまったくズーズー弁が見られないという事実即して考えれば、前者のような事情もあながち否定し得ないもののように思われてくるが、しかし、能登半島という狭い地域の中で、内浦と外浦とが長い間没交渉であったということは考えにくく、また、[-i]の数が、内浦から外浦にかけて漸次減っていくという事実からいっても、両者の間には、やはり、何らかの交渉があったと考えたほうが妥当かつ自然なように思われるので、以下、後者のような観点から、この問題に検討を加えていくことにする。

さて、今も述べた通り、[-i]の数は内浦から外浦にかけて、(A)(B)(C)(D)という順序で漸減していくので、これら相互の関係については、次の二通りの場合が考えられることになる。

(A) → (B) → (C) → (D) …… (イ)

(A) ← (B) ← (C) ← (D) …… (ロ)

(イ)は、かつてこの地方一帯にズーズー弁であったのが外浦で非ズーズー弁になったということの意味し、(ロ)は、それとは逆に、かつてこの地方一帯に非ズーズー弁であったのが、内浦でズーズー弁になったということの意味し

ている。

それでは、どちらが妥当かということになるが、この問題については、能登半島全域を精査した上でないと確かなことはいえないので、ここでは、解釈の方向を示すにとどめる。

まず、推定(イ)についていえば、ズーズー弁が非ズーズー弁化する要因としては、標準語の影響ということが第一にあげられる。東北地方には、標準語の影響によるズーズー弁の非ズーズー弁化という現象が事実として存在するので、能登についてもそれを参考に同様の事情を認めることができそうに思われる。しかしながら、内浦にズーズー弁が多く外浦にはほとんど見られないという現状からすると、外浦の非ズーズー弁を、標準語の影響によるものと見ることは無理がありそうに思われる。なんとなれば、もし、標準語の影響が及ぶとすれば、それは、交通不便な外浦よりも、交通の便のよい内浦のほうに先に及ぶということが考えられるからである。

標準語の影響が認めがたいとすれば、それでは、江戸時代における上方語の影響はどうかということになるが、これは、十分可能性がありそうに思う。江戸時代の日本海側における海運発達の状況からいって、上方語の影響が外浦に強く及ぶということは十分あり得ると考えられるからである。

ところで、推定(イ)のように、ズーズー弁がかつて能登半島一帯に分布していたと考えた場合、どうして、ズーズー弁が能登半島に古くから行なわれていたのかということが次に問題となる。これについても、二つの場合が考えられよう。一つは、能登半島でズーズー弁が非常に古い時代に他とは関係なく単独に発生したということ、もう一つは、やはり、非常に古い時代に、たとえば、出雲のズーズー弁が対馬海流に乗って北上し、能登半島にも上陸して定着するようになったということである。前者は、能登半島に非ズーズー弁を用いる人々がすでに住んでいたということを前提として成立している

が、後者についても、非ズーズー弁を話す人々がすでに能登半島に住みついていたところへ、出雲からズーズー弁の影響が及んできたと考えることが可能である。

いずれにせよ、この問題は、推定(ロ)とも密接に関連し合うことになるので、次に推定(ロ)をとりあげ、検討を加えることにする。

推定(ロ)は、非ズーズー弁のズーズー弁化ということの意味しているが、これについても、いま述べた通り、単独発生と他地方からの伝播という二通りの場合が考えられる。前者についていえば、辺地においては、中央語や文字語に接触する機会が少ないために言語に対する規範意識が薄れ、訛りの現象が起こり易いということがしばしば認められるので、能登半島でズーズー弁が単独発生する可能性は十分あり得ると推測される。後者については、出雲からの伝播ということのほか、越中からの伝播ということも考えられる。なぜかというに、すでに拙稿でも述べてあるように^(#4)、越中の海岸部一帯にもズーズー弁の分布が認められるからである。

それでは、出雲からの伝播はどうかということ、最近、石川県考古学研究会珠洲市史跡調査班が明らかにしたところによれば、「珠洲市岡田町などに散在している飛鳥時代(六世紀後半～七世紀前半)の約五百基の横穴群は、日本海岸最大の規模で、ここに住んでいた人たちは、遺物などから、当時、海上ルートを通じて出雲文化の影響を強く受けていた」^(#5)ということであるから、その可能性はやはり十分にあり得ると考えられる。ただ、その場合、問題となることが二つある。一つは、いつごろから出雲にズーズー弁があったのかということであり、もう一つは、どうして出雲からのズーズー弁が外浦には上陸せず、半島を迂回して珠洲市に侵入したのかということであるが、後者については、先に述べた推定(イ)の考え方を生かし、かつて外浦も内浦同様ズーズー弁であったのが、江戸時代に上方語の影響を受けて非ズーズー弁になってしまったと説明することができよう。なお、宇出

津付近に見られるズーズー弁の分布の虫食い状態については、明治以降の標準語化によるものと説明できる。

以上、解釈の方向をいくつか示したが、このうちのどれが妥当であるかはにわかにはきめがたい。いずれにしても、能登半島という限られた狭い地域に、ズーズー弁と非ズーズー弁とが、内浦に対する外浦という明瞭な地域差を示しつつ分布しているということは、全国的に見てもきわめて注目すべき現象であると思われるので、今後は、この点に焦点を合わせ、ズーズー弁の歴史再構のための調査研究を続けていくことにしたい。

2. 1. 2 その他の音声

「セ・ゼ」の口蓋音 [ʃe] [dʒe] は、予想に反して少なく、数地点に散在しているにすぎない。「セ」を [he] と発音する現象も、真脇 (08・13)・波並 (08・87)・白丸 (09・45) などの数地点に見られる程度である。ただし、「背中当て」(藁製)の俚語セナガチには [he] が多く、真脇のほかに、下藤ノ瀬 (08・22)・曾又 (08・99)・十郎原 (98・82)・寺分 (98・36)・真浦 (98・98) などでも、[henanatsi] または [henanatʃi] となる。なお、名舟 (98・28) では、「セ・ゼ」がすべて口蓋音となる。たとえば、背中 [ʃenaka]・背中当て [ʃenanatʃi]・咳 [ʃeki]・汗 [aʃe]・銭 [dʒen]・風 [kadʒe] など。

カ行音の有声化もほとんど見られず、神和住 (98・66) で猫 [nego]・竹 [tage]、徳成 (98・16) で竹 [tage] が聞かれた程度である。語中尾のガ行子音はすべて [ŋ] であった。

「ワ」と「バ」の交替現象もまったく見られず、「綿」「草鞋」の「ワ」はどこでもみな [wa]、「鯖」「煙草」の「バ」はどこでもみな [ba] である。

「ひげ」を [ɸuŋe] と発音する現象も予想外に少なく、白米 (98・61)・神和住 (98・66)・鶴川 (08・43) の3地点に見られたにすぎない。

なお、半島先端の飯田付近では、語頭の「ク」を [ɸu] と発音するが、このことについてはすでにくわしく述べてあるので^(註6)ここでは省略する。

一般に音韻は急速に標準語化されつつあるようで、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の混同や「イ」と「エ」の混同などをみると、音訛現象はほとんど見られなくなりつつある。

2. 2 語彙の分布

内浦対外浦という地域差と東側対西側という地域差とが交錯し合っているせいか、語彙の分布はきわめて複雑多岐で、たとえば、内浦に対す外浦といった一つの型にまとめて示すことはできない。そこで、ここでは、分布にまとまりのあるものをまずとり出し、語形の種類と分布のしかたに注目してそれを次の4つの型に分け、分布傾向を概観していくことにする。

AA型分布

AB型分布

ABA型分布

その他の分布

AA型分布とは、同一俚語が全域に連続的に分布している場合、AB型分布とは、異なる二つの俚語が隣合って分布している場合、ABA型分布とは、同一俚語が両側に分布し、その中間に異なる俚語が分布している場合、その他の分布とは、異なる多くの俚語がそれぞれまとまった分布模様を示す場合をさす。

2. 2. 1 AA型分布

次に掲げる俚語がこの型の分布を示す。

1) ボブラ (「かぼちゃ」の総称。)

2) ナツイモ (「じゃがいも」の総称。ただし、内浦には、ナツイモの訛語ナンイモが多い。)

3) リューキューイモ (さつまいも。これには、リューキイモ、リョーキューイモ、リョーキイモ、リョーコイモ、リョーキョイモ、リョーケイモ、ローケイモ、リンキイモ、

リーキイモなど訛語が多い。なお、内浦にはサツマイモが多いが、白丸(09・45)にはイセイモ、小木(08・19)にはゴーシュイモも分布している。話者によるとイセは「伊勢」、ゴーシュは「江州」の意であるという。)。

- 4) コイモ(さといも)
- 5) ゴット(蛙)
- 6) コマ(牡馬。ただし、能都町・内浦町にはマが多い。)
- 7) シンタク(分家)
- 8) イッケ(親類。ただし、白米(98・61)・野田(98・74)・忍(98・91)・上河内(98・24)ではヤウチ、吉尾(08・65)ではオヤコとなる。ヤウチは輪島市西部にも分布している。オヤコは、北陸の場合、調べた限りでは、越中の五箇山 加賀の白峰村・尾口村・鳥越村・吉野谷村中宮・山中町大内、越前の丸岡町曾谷など、山間の集落にしか見られない。)
- 9) ヘンゴロツク(片足跳び。ヘンゴリツク・ヘングリツクも見られる。)
- 10) ヒザコベ(膝頭。ヒザノサラも若干ある。)
- 11) ネマル(あぐらをかく。内浦の海岸部にはアグラカクも若干分布する。)
- 12) ツクボー(正座する)
- 13) あぐらをかく(ネマルの意味。「坐る」の総称としても用いられるが、そのほかに「あぐらをかく」もさす。ただし、内浦の海岸部には、「坐る」の総称としてしか用いていない地点も若干ある。これらの地点では、アグチカクで「あぐらをかく」を表わす。ネマル(あぐらをかく)・ツクボー(正座する)・「あぐらをかく」(ネマルの意味)もオヤコと同様、北陸では山間部にしか分布していない⁽¹⁷⁾。「正座する」は平野部ではオツクパイスルとなる。)

これらの語例は、当然のことながら、この地域の方言が、奥能登方言といった共通の基盤の上で成立していることを示している。

2. 2. 2 AB型分布

「きのこ」「いろり」「とさか」「たてがみ」「熊手(竹製)」「蟻地獄」「かつぐ(肩に物をあげる動作一般)」「とげ(竹や木の裂片)」「山ぶどう」などがこの型の分布を示す。

はじめに「きのこ」の分布図を掲げる。「いろり」も似たような分布を示すが、「きのこ」に比べると、A(ヘンナカ)は狭く、B(エンナカ)は広い。

図2 きのこ

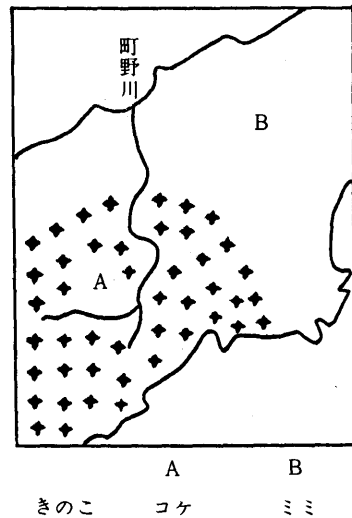
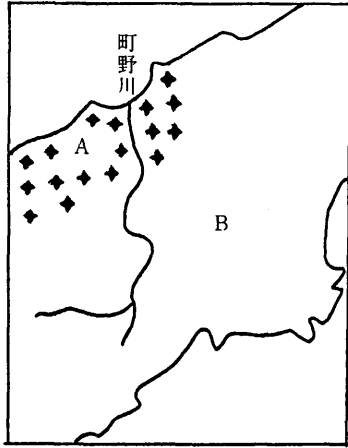


図2には示さなかったが、B地域には、ミミとコケとを併用し、ミミは古くコケは新しいと報告する地点が多い。A地域ではミミからコケへの変化が完了し、B地域では、目下、進行中と見ることができよう。なお、馬場宏氏の『能登半島先端部の方言分布』⁽¹⁸⁾にも「きのこ」「いろり」の分布図が掲げているが、分布のしかたは概ね同じである。

次に「とさか」をとりあげる。「たてがみ」「熊手(竹製)」も似たような分布を示す。しかし、分布の範囲が若干ちがっていて、「とさか」のAは輪島市にだけ分布するが、「たてがみ」のA(オシャガミ)と「熊手」のA(ビブラ)は輪島市だけではなく柳田村にも分布するようになる。

「たてがみ」のBはタテガミ, 「熊手」のBはペブラである。なお, 「熊手」にはビビラという言い方もあるが, これは, 調査地域の西側に多く分布している。

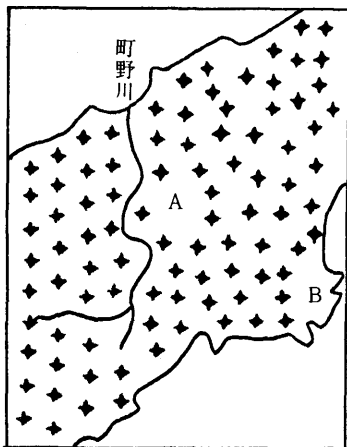
図3 とさか



とさか トチ モチ

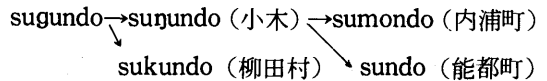
次の図は, 「とげ (竹や木の裂片)」の分布を示したものである。「山ぶどう」も似たような分布を示す。「山ぶどう」のAはグンド, Bはスモンドである。

図4 とげ (竹や木の裂片)



とげ キバラ キバラ

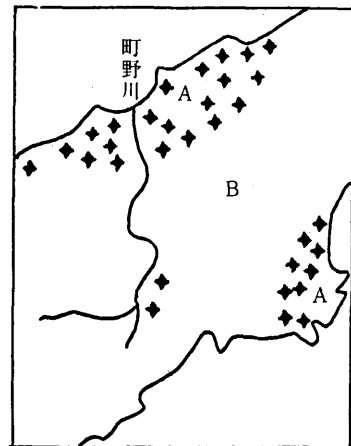
「とげ (裂片)」に比べると「山ぶどう」の分布はやや複雑で, 鈴ヶ嶺 (98・62) ・久田 (98・29) ・上町 (98・46) などにはスクンドが分布し, 吉尾 (08・65) ・上藤ノ瀬 (08・94) ・宇加塚 (08・61) などにはスンドが分布している。小木 (08・19) は [sijundo] である。小木の [sijundo] を参考に考えるに, スモンド・スクンド・スンド・スグンドはいずれも同源の語で, 次のような過程を経て「酸ぐんど」から出てきたものと推測される。グンドが土台になっている点が注目される。手取川上流の山間部に分布するスイエビ・スピ^(註9)とは源を異にする語である。前者は漢語の「葡萄」(ぶどう), 後者は和語の「えび」にもとづく語である。



2. 2. 3 ABA型分布

まず, 「とげ (山椒やばら)」をあげる。「鏡餅」も似たような分布を示すが, A (オカガミ) の分布範囲が狭く, 輪島市・柳田村にはAは分布せず, B (ミカガミ) が分布している。輪島市南志見地区ではミカガミのほかにアタタケも用

図5 とげ (山椒やばら)

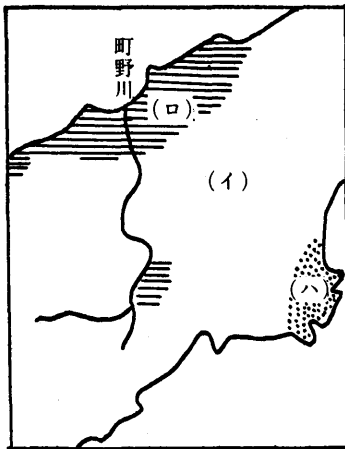


とげ イバラ ハリ イバラ

いている。ミカガミとアタタケの併用地点では、「アタタケ(古) / ミカガミ(新)」と説明したり、「アタタケ(搗きたてのあたたかい鏡餅) / ミカガミ(固くなった鏡餅)」と説明したりする。ミカガミの語源についても、「三つ重ねの鏡餅」「みかんを載せた鏡餅」などさまざまな説明が見られる。これらの説明は、「ミ」を接頭辞とみる意識が次第に失なわれつつあることを示している。

図5に、先に掲げた図4を重ね合わせると、「とげ(山椒やばら)」と「とげ(竹や木の裂片)」の使い方は次のようになる。これは、この地域における「とげ」の歴史再構のための重要な手がかりになり得ると思う。

図6 「とげ」の総合分布図

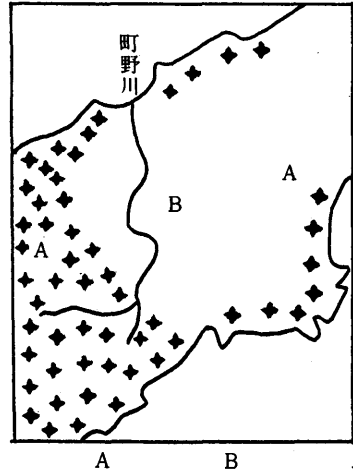


とげ(山椒) とげ(裂片)

(イ)	ハリ	キバリ
(ロ)	イバラ	キバリ
(ハ)	イバラ	キバラ

図7は「蟻地獄」の方言分布を示したものである。Bのハッコムシはカッコムシの訛語と思われる。カッコムシの語源を、「郭公の鳴く頃に出る虫」と説明する話者が多い。

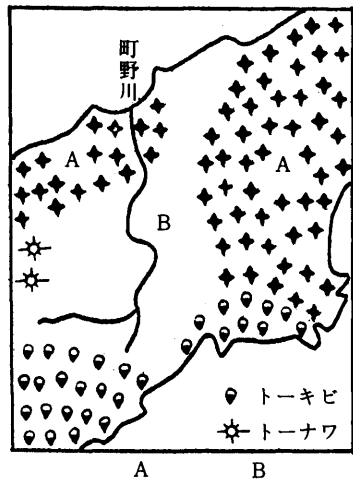
図7 蟻地獄



蟻地獄 カッコムシ ハッコムシ カッコムシ

「とうもろこし」もABA型分布の一種と見られるが、分布のしかたはやや複雑で、トーノキビ・カシキビのほかにトーキビ・トーナワも分布している。

図8 とうもろこし



とうもろこし トーノキビ カシキビ トーノキビ

まず、AのトーノキビとBのカシキビとの関係についていえば、かつてこの地方一帯に分布していたAのトーノキビがあとで発生したBのカシキビによって分断され、内浦と外浦の両方に分かれて分布することになったということが

考えられる。

しかし、この解釈には無理がある。なぜかというに、粟蔵(98・90)・佐野(98・57)・麦生野(98・69)などの話者は、異口同音、カシキビは古くトノキビは新しいと説明し、また、源平(08・54)・上藤ノ瀬(08・94)・波並(08・87)・宮地(08・81)などの話者も口を揃えてトノキビと同源のトキビについて、トキビは新しくカシキビは古いと説明しているからである。このような話者の説明に即して考えた場合には、先の推定とは逆に、カシキビがこの地方一帯に分布していたところへ、内浦と外浦の両海岸沿いにトノキビが侵入し、さらに内浦へはトキビが侵入したと解釈されることになる。

それでは、どちらが妥当かということになるが、この問題については、この地域の分布を見ていただけでは結論が出せない。そこで、範囲をひろげて他の地域、他の地方における「とうもろこし」の名称も調べてみたところ、カシキビは、石川郡河内村内尾にも分布しているし、また、『日本語地図』の「第182図とうもろこし(玉蜀黍)」によると、佐渡や新潟県北部にも分布しているということがわかった。さらにまた、江戸時代の『物類称呼』(安永4年<1775>)を繙いてみるに、「畿内にてなんばんきび又菓子きびと云。(中略)奥州より越後辺にてまめきび又くはしきびともいふ。」^(註10)とあるので、カシキビについては、B地域で単独発生した語ではなくて古語の残存と見たほうがよさそうに思う。そのほうが、話者の説明とも矛盾せず、妥当なように思われる。

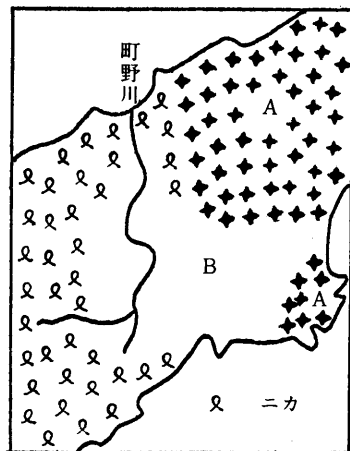
「とうもろこし」の方言分布で、次に問題となるのは、トナワである。トナワの分布は、上河内(98・24)・大箱(98・88)の2地点にしか見られないが、昭和50年7月に金沢大学教育学部国語研究室が行なった調査によると、輪島市旧市内・稲舟・市ノ瀬・三井・二俣・別所谷等、輪島市一円にもその分布が認められるので、これは、もと、輪島市のトナワにつながっ

ていた語と考えられる。

ところで、これらのトナワについては、富山県庄川流域に広く分布するトナワや石川郡尾口村深瀬・釜谷に分布するターワとの関係如何ということが問題となる。語源的には、どちらも、「唐の粟」から出てきた同源の語と思われるので問題はないのであるが、その歴史については、古語の残存・単独発生等さまざまな場合が考えられるので、結論がなかなか出しにくい。しかも、この問題については、『日本語地図解説——各図の説明4——』が「キビになぞらえることが嫌われるか(黍そのものがあまり親しいものでなかったか)、あるいはすでにトオキビ(蜀黍)があるかして命名されたのであろう。」^(註11)と述べているような事情もあわせ考えなければならないから、なおさら厄介である。北陸地方における「粟」「黍」栽培の歴史やトキビの意味の変遷などについて調べた上で、また改めて考えてみることにしたい。

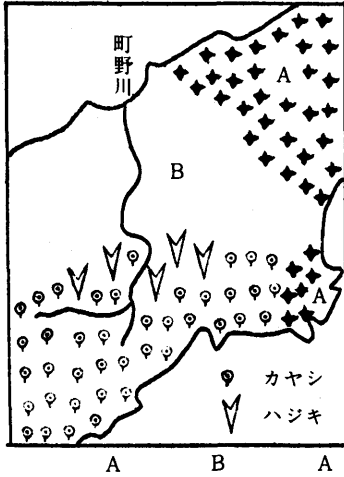
次に掲げる「もみがら」「お手玉」「井戸」などにも、部分的ではあるが、ABA型分布が見られる。

図9 もみがら



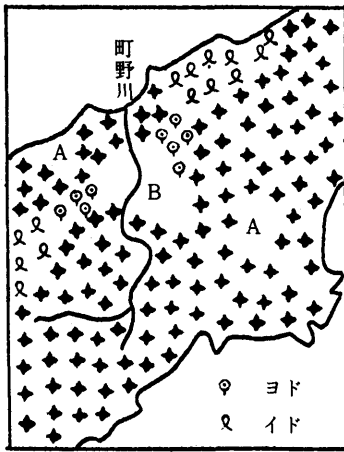
もみがら A B A
スリネカ ネカ スリネカ

図10 お手玉



お手玉 イシナゴ シメタマ イシナゴ

図11 井戸



井戸 イケ ヨドイケ イケ

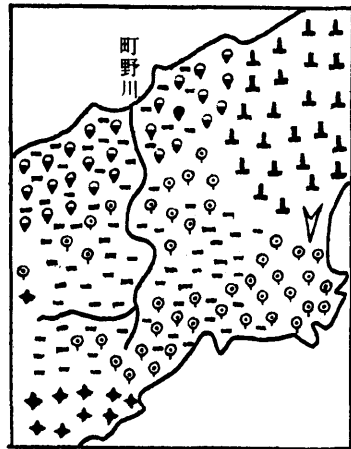
こうしてみると、先に掲げた図6の「とげ(山椒やばら)」の場合も含めて、この地域には、珠洲市と珠洲郡内浦町の両方に(A)が分かれて分布し、その間へ柳田村方面から(B)が割込むような形で分布している場合の多いことに気づく。珠洲市も内浦町ももとは同じ珠洲郡に属していたわけだから、珠洲市と内浦町に同じ(A)が分布していたとしても、別に不思議なことではないといえる。この地域の方言分布に

とっては、それよりもむしろ、両者の間へ割込む形で分布している(B)の出自・由来という問題のほうが、重要な意義を持つ。柳田村から鶉飼(98・59)方面への侵入ということがまず考えられるが、その逆の場合もまたあり得るので、検討を要する。

なお、「井戸」についていえば、元来、どういう水汲み場をさしてイドと呼びイケといったのかということも問題になるし、また、イドとヨドの関係についても、イド→ヨドといった単なる音韻変化ではなくて、ヨドすなわち「淀・澱」と見る意識が働いて生じた変化ということも考えてみなければならないように思う。水汲み場の問題が、この場合にもからんでくることはいうまでもない。

次に掲げる「ものもらい(麦粒腫)」の方言分布も、メモライに対するイモライ、メチンボに対するメチョンボといった工合に、語形を若干異にはするが、やはり、ABA型分布の一種と見てよいように思う。ただし、(B)(B')の地域には、メガタネを併用している地点が多く、単純に、ABA型分布とはいえない面もある。

図12 ものもらい



- ◆ メモライ(A)
- ▲ イモライ(A')
- メガタネ
- メチンボ(B)
- (点) メチョンボ(B')
- ▲(点) メマラ

分布のしかたからいって、メモライ・イモライが古く、メチンポ・メチョンポは新しいということがまず考えられる。話者によると、メチンポもメチョンポも、「ものもらい」を幼児の「男根」になぞらえた言い方であるということなので、これらのことばは、そうした比喩的表現としてこの地域で使われ始めた新しい言い方であろうと推測される。メチンポとメチョンポとでは、メチンポのほうがもとのメチンポはそれから生じた訛語ということが考えられる。ただし、これも単純な音韻変化による訛語ではなくて、メチンポだと語源がはっきりし過ぎて使いにくいので、それに少しデフォルメを加えてメチョンポにした、という事情が背後にあって出てきた訛語ではなかろうかと想像される。鶉飼(98・59)にメマラが分布しているが、これも、イモライのもとのことばであるメモライからの単なる訛語なのではなくて、「男根」に対する連想が背後にあって生じた、メモライ→メマラという変化でありそうに思われる。メマラが、メチョンポとイモライ(←メモライ)の中間に分布している点が注目される。

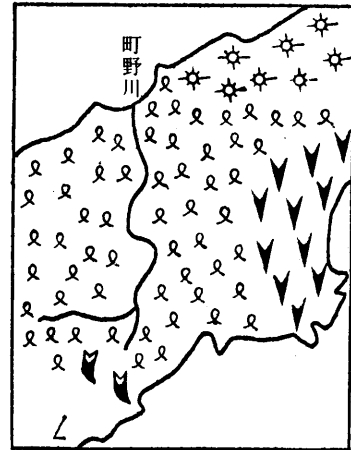
メガタネとメチンポ・メチョンポの併用現象については、新古の関係ということのほか、位相のちがいがいいということも考えられる。すなわち、両者の間には、普通語のメガタネ(「目のふちのできもの」という意)に対する俗語的な言い方としてのメチンポ・メチョンポというちがいがあったのが、時代が下るにつれてそうした意識がだんだん薄れ、メガタネの代わりにメチンポ・メチョンポを普通に用いるようになったのではないかと考えられる。麦生野(98・69)・桐畑(93・37)・久田(98・29)・平体(08・28)・波並(08・87)の話者による、メガタネは古くメチョンポは新しい、という内省報告の背後には、そんな事情がひそんでいそうな気がする。

2. 2. 4 その他の分布

ここでは、「牛(総称)」「つらら」「がんどき」の三つをとりあげる。まず、「牛」について

述べる。

図13 牛



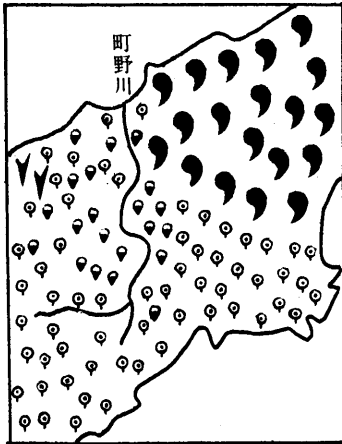
- ⊙ バッコ
- ▼ ベッコ
- ▽ ホッコ
- ☆ モンコ
- ∟ ウシ

矢波(08・69)にもモンコの分布が見られるが、話者によると、これは幼児語であって、普通は、バッコを用いるという。矢波に隣接する鶉川(08・43)・瑞穂(08・36)にはベッコが分布している。馬場宏氏の『能登半島先端部の方言分布』によると、珠洲市の先端部にはデッコが分布しているという。牛の呼び名がこのように多彩であるのは、『日本語地図解説』も述べているように^(註12)、牛の鳴き声の捉え方とその表わし方に原因がありそうに思われる。ちなみに、『日本語地図』の「第210図もうもう(牛の鳴き声)」では、能登半島における牛の鳴き声の擬声語として、Moo, MOON, Boo, MEEN, Uuなどをあげている。

次に、「つらら」の方言分布を示す。

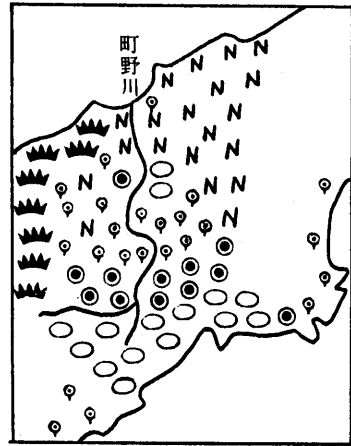
金蔵(98・79)・四ツ谷(98・42)では、ホーダレとボーダレを併用しているが、話者による

図14 つらら



- ボーダレ
- ホーダレ
- ☾ タレンコ
- ▽ シシッポ

図15 がんもどき



- 👑 ミイデラ
- マルヤマ
- マルアゲ
- ⊙ ガンモドキ
- N 無回答(NR)

と、ホーダレが古く、ボーダレは新しいということである。吉尾(08・65)・上藤ノ瀬(08・84)には、カネコリも分布しているが、話者によると、カネコリは新しい言い方であるという。白米(98・61)と野田(98・74)のシシッポは珍しい^(#13)。

次に、「がんもどき」の方言分布をとりあげる。まず、注目されるのは、加賀地方一円に分布するミイデラ(ただし、加賀市と金沢は除く。加賀市と金沢にはヒローズが分布している。)が、輪島市にもひろく分布していることである。

次に注目されるのは、マルヤマとマルアゲである。これは、すでに述べてある通り^(#14)、富山県庄川流域にも分布し、このうちマルヤマは、さらに氷見を経て七尾・能登島に至る地域一帯にも分布している。能都町のマルヤマは、これにつながる語であるといえる。ただし、甲(08・90)には、マルヤマの分布は見られず、ガンモドキが行なわれており、また、昭和50年7月に金沢大学教育学部国語研究室が行なった調査によると、穴水町穴水・比良・下出などにもマル

ヤマの分布が見られず、やはり、ガンモドキが行なわれている。穴水の話者は、ヒローズも出しているが、これは、金沢から持ち込んだものらしい。ちなみに、ヒローズは、ポルトガル語の *filhós* から出た上方系の語である。

このような分布のしかたから考えるに、能都町のマルヤマについては、内浦を海岸伝いにひろまってきたのではなくて、七尾から宇出津へ直接移入されたものということがまず考えられる。これとは逆に、西廻り海運などによって宇出津へ持ち込まれたマルヤマが、七尾や氷見・新湊方面へと伝播していったということも考えられなくはないが、宇出津から外浦にかけて見られる「がんもどき」という食品そのものの普及の状況やマルヤマという俚語の分布範囲などからいって、そのように考えることには無理がありそうに思われる。やはり、七尾から宇出津への伝播と見るべきであろう。おそらく、ガンモドキという標準語(ガンモドキは古くから江

戸で使われてきた関東系の語である)がひろまってくる以前に、「がんもどき」という食品に伴なわれてマルヤマという名称が、七尾から宇出津に伝播し、その周辺にひろがったものと考えられる。分布の状態からすると、マルヤマの奥にマルアゲが分布しているわけだから、マルアゲのほうがマルヤマより先にはいり込んだということが考えられるが、しかし、マルアゲについては、マルヤマに「円い揚げ物」という民衆語源が加わってできた新しい語形ということも考えられるので、かならずしも、そうとばかりはいえない。

マルヤマ・マルアゲの次に問題となるのは、ガンモドキとNR(無回答の略号)である。まず、無回答についていえば、これは、「がんもどき」という食品そのものが、まだこの地域に十分普及していないことを物語っている。事実、この地域には、「がんもどき」という食品を知らない話者が多い。次に、ガンモドキについて、これは、関東出自の標準語であって、「がんもどき」という食品とともに、最近ひろまってきたばかりのごく新しい言い方であろうと考えられる。そうであるとする、これらの地域についても、無回答地域の場合と同様、一昔前までは、「がんもどき」という食品そのものさえ知らなかったということがいえそうに思う。

ミイデラとマルヤマとヒローズの関係については、能登地方の全域を精査した上でないと確かなことはいえない。予想としては、ミイデラが自家製の仏事用食品として早くから用いられていたところへ、マルヤマ・ヒローズが、商品として京阪方面からひろまってきた日常食品化したという事情が考えられるが、確かなことはわからない。この問題については、後日また、稿を改めて述べることにしたい。

おわりに

三方海に囲まれた半島を対象に、そこで行なわれている方言の歴史を再構築しようとすることは、きわめてむずかしい問題である。なぜかと

いうに、たとえば、他地方からの伝播・侵入という問題を考える場合にも、たえず、陸伝いに半島の基部から侵入してくる現象と海から半島周囲の港へ侵入してくる現象との両面に目を配っていただかなければならないからである。能登半島の場合もその例外ではない。これへさらに半島内部における単独発生の問題が加わるので、事態はますます複雑多岐なものとなる。能登半島における方言分布の複雑さも、こうした三つの要素のからみ合いによって生じたものであることはいうまでもない。

このからみ合いをときほぐすには、能登半島全域を対象とした綿密な言語地理学的調査がまず必要とされるが、それだけではもちろん不十分で、さらに京阪から出雲へと調査地域の範囲をひろげていかなければならない。今後もそうした展望のもとに、能登に分布する方言事象の歴史を明らかにすべく調査研究を続けていきたいと考えている。

(注1) 岩井隆盛氏の「語彙から見た能登」(『能登—自然・文化・社会—』所収)にくわしい。

(注2) 昭和47年7月には富来町酒見(話者は明治36年生まれ男性)、昭和50年7月には門前町皆月(話者は明治34年生まれ男性)を調査したが、どちらも発音のしかたがきわめて明瞭で、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の混同は認められなかった。

(注3) 昭和44年8月に能登島町の須曾(話者は明治33年生まれ女性)と野崎(話者は明治18年生まれ女性)を調査したが、その結果、どちらも「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」を区別せず、すべて[si][dzi][tʃi]と発音しているということが明らかとなった。

(注4) 拙稿「富山県庄川流域におけるズーゾー弁の分布とその解釈」(『金沢大学語学文学研究』第2号所収)参照。

(注5) 『北国新聞』(昭和50年9月7日朝刊)の記事による。

(注6) 拙稿「石川県珠洲市方言の「ク」と「フ」」(『金沢大学語学文学研究』創刊号所収)参照。

(注7) 拙稿「北陸地方における「ネマル」の意味の分布と解釈」(『佐藤喜代治教授退官記念論集』所収)参照。

(注8) 昭和29年8月から昭和33年4月にかけて行

なった調査結果をまとめ、昭和35年12月に発行したもの。

- (注9) 拙稿「石川県手取川流域の方言分布」(『金沢大学教育学部紀要』第23号所収) 参照。
- (注10) 『物類称呼』巻之三・四〇下。
- (注11) 国立国語研究所編『日本言語地図解説—各図の説明4—』66ページ。
- (注12) 国立国語研究所編『日本言語地図解説—各図の説明5—』には「牛の鳴き声(の表現)と牛をあらわす表現とがつながりをもちうることは確かである。」(19ページ)とある。
- (注13) 国立国語研究所編『日本言語地図』第6集所収の「第262図つらら(氷柱)」にもシッポは出てこない。
- (注14) 拙稿「富山県庄川流域における「がんもどき」の方言分布とその解釈」(『金沢大学語学文学研究』第4号所収) 参照。

[付記] この研究は、昭和49年度文部省科学研究費による研究の一部である。